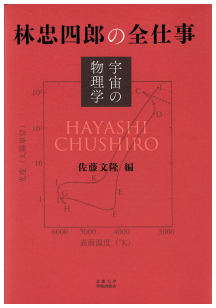
書評

「林忠四郎の全仕事」

佐藤 文隆 編
京都大学学術出版会
2014年5月刊行　全816ページ　定価15,120円
ISBN: 9784876984978

牧野 淳一郎[1]



林忠四郎の「全仕事」といいながら，781 ページのこの本は日本語である．つまり，論文集ではなく，林忠四郎およびその周辺の人々の，日本語で書いた文章，解説記事，対談，追悼記事等を集めたものである．

しかし，この「全仕事」の意義は，編纂にあたった皆様には申し訳ないが，なんといっても第I 部「林忠四郎の自叙伝」にある．生前から存在は知られていたものの，ごく一部のものしかみていなかった自叙伝が，活字となって公表されたのである．覗き趣味とか論文読めとかいった声が聞こえるような気もするが，読まない，という選択はありえない．林は日本の現在の理論天体物理学研究，理論惑星科学研究の祖というべき存在であり，そのような「大成功」をおさめた研究者がいったいどのようなことを考えて研究テーマを定め，研究室運営をし，学生を指導してきたのか，を本音で語った貴重な資料なのだ．

テーマ選定，研究室運営という観点からは，天体核研究室ができた経緯が興味深い．1957年，即ち，1954年度に日本における原子力研究が開始されたわずか3年後に，原子核理学専攻核エネルギー講座が創設されており，林はその教授として「天上と地上の核融合」の研究をテーマとした．それまでの林は，素粒子理論，ビッグバン元素合成，赤色巨星の構造等の研究で業績をあげていたものの，地上における核融合についてはほぼ素人である．本人の言葉を借りるなら「1954年から1958年の間に多数の論文とL. シュピッツァーの本「完全電離ガスの物理」やT. カウリングの本「磁気流体力学」などを読んで勉強したが，そのエネルギー利用の実現可能性については，確信が持てるような見通しが得られなかった．実現には，少なくとも，孫の代までは待つべきものと考えていた」とある．それでも，京大におけるヘリオトロン研究をスタートさせ，日本語での教科書も執筆した．しかし，早くも1960 年には研究室における「地上の核融合」研究は中止し，天体核物理研究に集中，その後は，林フェーズの発見から，研究テーマを主系列にいたる前の星形成，さらには惑星形成へと，核融合と関係あるとはいいがたいところへ広げていくことで，現在にいたる日本における理論天体物理研究の祖となった．これはもちろんよく知られていることではあるが，本人の証言はやはり興味深い．また，現在の，文科省の意味不明の「改革」のいいなりになっている大学(その先にあるのが筆者の現所属の理研である)から見ると，講座の設立目的をわずか3 年で反故にできた，ということにある種羨望を感じないわけにはいかない．

もうひとつ，印象深いのは，林の徹底した研究中心主義である．利己的とも見えるその姿勢は，自らが学部長に落選するべく工作したこと，他大学への転出まで検討したことを述べる林の口調に現れているほか，自叙伝の随所から読み取ることができる．京都大学定年まで，さらには定年後まで，自分の研究をひたすらに追求する姿勢には圧倒される一方，それには，では「老害」の面は全くなかったといいきれるのか？という疑問もわいてくる．

ほぼ同時代の早川幸男(「素粒子から宇宙へ」に垣間見ることができる)と比べると，優れた研究者のあり方も色々である．それほどではない研究者はどうするべきか，考えさせられた．

1. 独立行政法人理化学研究所 計算科学研究機構
jmakino@riken.jp